

# 正中版「寒山詩集」について

廣 山 秀 則

(一)

「寒山詩集」とは、正しくは「寒山子詩集」と云い、唐書藝文志には「對寒山子詩」七卷とあり、宋史藝文志には「寒山拾得詩」一卷、四庫目錄には「寒山子集」二卷附豐干拾得詩一卷等の記載があり、又寒山詩の他に豐干、拾得兩者の詩を併せて「三隱詩集」又は「三隱集」と云われる事がある。今ここで述べんとする寒山詩集の版本は、我が鎌倉末期、即ち、正中二年（一二二五）に翻刻された所謂「五山版」であり、この版の寒山詩集については、現存のものは現に石井光雄氏所藏のものが今日まで知られていた唯一のものであり、先年（一九五八）これが複製も石井氏によつてなされたのである。

39 (廣山)

ところで大谷大學圖書館の禿庵文庫（元學長故大谷瑩誠

先生の藏書）として收藏されている中にも、これと同じ版の寒山詩集一本がある。今この寒山詩集について、他の若干の版本の系統その他を比較考察し乍ら紹介してみよう。

(二)

まず寒山詩集の版本の種類若干を中國と我が國とに分け、刊刻された順を追つて述べてみると、中國で最初に刻されたと思われるものは、宋の淳熙十六年（一一八九）に國清寺の沙門志南によつて、刊行されたものであり、これは日本・中國を通じて最も古いものである。宮内廳の書陵部に藏せられて居る所謂、宋刊本「寒山子詩集」は、志南刊のものではないが、之が直接系統のものであり、宋紹定二年（一二二九）に無隱によつて重刻さ

れ、更に、その後、無我慧身により補刻されたものである。<sup>②</sup>これは明治三十八年に島田翰氏によつて排印され、(民友社、宋大字本寒山詩集) 又、昭和三年には景印本として出版されて居り、(審美書院) これには豊干、拾得の詩をも附して居る。そして今一つの宋刊本は四部叢刊の後印本として出されたものと版で、明末の藏書家毛晋が藏していた、所謂「建德周氏本」で、これにも豊干禪師録及び詩、拾得録及び拾得詩を附して居る。次に同じく南宋の江東漕院で刊行されたもの、この江東漕司本を以て行果が校訂したもの、明正徳十一年(一五一六)に刻されたもの等がある。又、宋本そのものではないが四部叢刊の初印本として景印されたもので朝鮮版本を底本としたものがあるが、これには所々宋の缺筆「恒」が殘存する所よりして原本たる宋本が考想される。又、最近では明萬曆二十七年(一五九九)刊「寒山子詩集」(内閣文庫藏)、清光緒四年(一八七八)刊「寒山拾得詩集」(御選語錄卷三の中)等の版本が主なものとして擧げられる。朝鮮では前述したものがその主なものである。

次に我が國の版本では、今、紹介せんとする正中二年(二三二五)刊の「寒山子詩集」、寛永十年(一六三三)刊の「寒山詩」(内閣文庫藏)、正保四年(一六四七)刊の

「三隱詩集」、寛文十一年(一六七二)刊「三隱詩集」三卷(靜嘉堂文庫藏)、寛文十二年(一六七二)刊の「寒山子詩集管解」七卷(龍谷大學圖書館藏)、延寶元年(一六七三)刊「寒山詩管解」、元祿十四年(一七〇二)刊「寒山詩集鈔」五卷(寒山詩のみ收花園大學圖書館藏)、延享三年(一七四六)刊「寒山詩闡提記聞」三卷、寶曆九年(一七五九)刊「三隱詩集」(靜嘉堂文庫藏)等があり、この他にも江戸時代のものとして「首書寒山詩」、「寒山詩索頌」三卷等が擧げられ、更に最近では「寒山詩講義」、岩波文庫本「寒山詩」、極く最近では寒山の詩全部ではないが、入矢義高氏の「寒山」(中國詩人選集の中)がある。又、島田翰氏の説によれば元和中にも刊行されたものがあるらしい。この中「寒山子詩集管解」以降のものはすべて註釋書である。

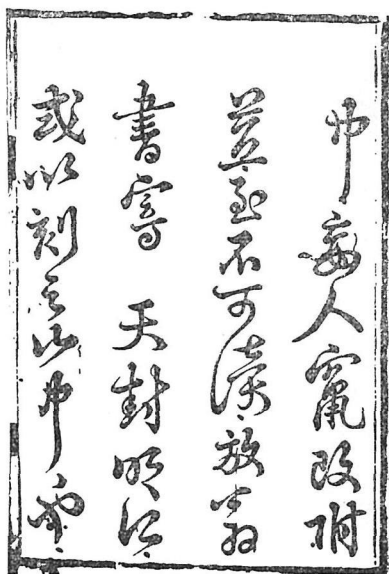
以上、大まかに中國、朝鮮、日本で刻された寒山詩集の主なものを列擧したが、これらの版本の内容その他に就いては、和刻本は正中版と殆んど同じである爲に、ここでは省略するが、他の四本(宋版、建徳周氏本、朝鮮本、正中版)を主として比較しつつ述べる事とする。

この正中版寒山詩集の體裁を述べる前に、まず從來この版を紹介し、又は説明したものを挙げれば（尤も禿庵文庫本ではないが）、長澤規矩也氏「書誌學論考」六十二頁、同氏「和漢書の印刷とその歴史」百十九頁、同「わが國における漢籍の翻刻について」（神戸博士還曆記念書誌學論集七頁）、川瀬一馬氏「日本書誌學の研究」四十一頁、同氏「古活字版之研究」七十二頁、和田維四郎氏「訪書餘録」、第五篇一丁、和田萬吉氏「日本書誌學概説」百九十三頁、「日本古刻書史」五十頁、入矢義高氏「寒山」（中國詩人選集5）二十頁、「近畿善本圖録」「善本影譜」等々があるが、その詳細な説明は、あまりなく、わづか長澤氏だけが、その形態及び内容を述べて居られる程度である。

さて、この禿庵文庫本の「寒山詩集」は豎二五・二纏、横一八・四纏、（匣郭内二一・三×一四・四）装訂は袋綴、丹表紙、全丁九十五丁、首に

國清南公所刊寒山詩 錯誤最多甚不稱晦庵 先生  
 丁寧流布之意今以 江東漕司本參互校定重 刻之  
 山間据詩稱五言五 百七字七十九三字二十一則今  
 所存纔半耳寶祐三年乙 卯九月且住靈鷲山行果謹書

(一丁)



圖一 正中版「陸放翁與明老帖」二丁目

とあり、半葉四行、毎行九乃至十三字で行果なる人物の眞跡によつて刻されたものである。次に「陸放翁與明老帖」（二丁）が半葉四行で附され、次に、「朱晦庵與南老帖」（三丁）が半葉六行（以上界なし、白口、左右雙邊）で何れも眞跡により刻さされてある。次に間丘胤の「寒山子詩集序」（四丁）が半葉八行、毎行十七字、有界白口左右雙邊、版心は上魚尾に「序」及び丁數を刻し、巻頭に「寒山詩」と題し、寒山詩末に「寒山詩終」とあり、次に「豐干禪師錄」「拾得錄」「拾得詩」と題し、詩末に「三隱詩卷終」とあり、次いで、「釋音」（二丁）があり、巻尾に志南の「天台山國清禪寺三隱集記」（五丁）が

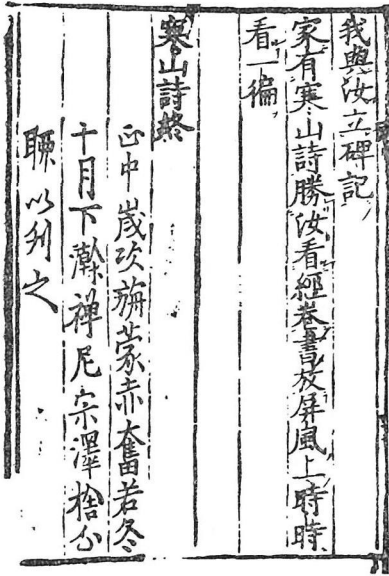
ある。そして刊記(圖二)は寒山詩の末に續いて

正中歳次旃蒙赤奮若冬 十月下澣禪尼宗澤捨心  
聊以刊之

の三行二十四字がある。又、この詩集全體を通じて所々に宋諱を避けて缺筆が見られる所よりして、宋刊本の覆刻である事が知られるのである。(尚、この缺筆については後に述べる)

次に本詩集に收められて居る詩の數を見ると寒山の詩は三百十三首、豐干の詩は二首、拾得の詩は五十五首で計三百六十首である。

以上正中版「寒山詩集」を形態の上から簡単に述べた



圖二 寒山詩末刊記

が、次に序文より順次他の版本と比較考究してみよう。

先ず、最初の行果の序文であるが、この行果なる人物は、この文により靈鷲山に住んでいた事及び南宋の人である事以外は、その傳を知る事はできないが、しかし、人物は知れなくとも、この文により國清寺の志南によつて編輯された寒山詩集が、あまりにも、誤りが多かつた爲に、この時代に校勘及び再編纂が成された事及びこれ以前に江東漕院で刊行された事が明らかになると共に、この江東漕司本の大體の形態を伺ふ事ができる。この序文が彼の自筆によつて刻されたものは、正中版にだけ附されて居り、他の版本の中自筆ではないが附されて居るのは寛文刊「寒山子詩集管解」及び延享刊「寒山詩闡提記聞」の卷末だけで、これによつて、更にこの版を底本にして刊された事がわかるのである。

次に、「陸放翁與明老帖」は二丁にわたり、陸放翁の眞跡を刻したものらしいが、題字は楷書で記され、この後の「朱晦庵與南老帖」の題字と共に、別人の書體である。この二つの帖は書陵部に藏せられる宋版(以下宋版と呼ぶは書陵部本の事)のこの部分と比較すると、一丁目は版を全く同じくし、次の丁、即ち二丁目(圖一)は書體の一部及び匡郭が少しく異り、書體も亦少し善くな

い様に思われる。そして宋版の方は閻丘胤の序の後に朱晦庵與南老帖に續いて附いて居るが、正中版ではこの前に附いて居る。そして文中に宋仁宗の諱を避けて「貞」の字の末畫を缺筆している。

次に「朱晦庵與南老帖」が三丁にわたり、陸氏と同じく眞跡によつて刻されて居るが、この方は宋版に附されたものと書體・匡郭共に全く一致する所より、又、正中版の二翁の帖の部分も他の部分の紙質と同一である事からも恐らく宋版に附されて居る二翁の帖は正中版のものを後になつて、補修の際に附したものではなからうか、又、この兩帖の附されている順序が、宋版では朱翁の帖が陸翁のその前、閻丘胤の序の後に附されてあるが、正中版の順序、即ち閻丘胤の序の前に二翁の帖が來るのが當然の様に思われるのである。但し、正中版の陸朱二帖の順序は他の版と考へ合わせると、朱が前で陸が後であつたらしい。

(以上述べた部分、即ち「行果の文」、「二翁の帖」は從來知られていた所の正中版寒山詩集(石井氏所藏)には後に附されている豊干禪師錄以下の部分と共に全く見られなく閻丘胤の序と寒山詩のみである。)

これに續いて閻丘胤の寒山子詩集序であるが、これは

他の版本に見られるものとあまり異なる所はなく、(ただ文字が宋版とは四字、朝鮮本とは二字が異なる) 缺筆も全く見當たらないが、宋版では「玄」の字が缺筆されて居る。そして宋版及び建德周氏本は讚の所が四字づつで切つて、一行三段となつて居るが、正中版では全文同様に最後まで一行十七字づつである。これは朝鮮本も亦同様である。又、閻丘胤の肩書きが、この版、朝鮮本及び建德周本では

朝議大夫使持節台州諸軍州守刺史上柱國賜緋魚袋閻丘胤

となつて居るが、宋版及び寛文版では

……諸軍事守刺史……

となつて居り、元祿版では

……諸軍守刺史……

とあり、延享版では

……諸軍主刺史となつて居る

次は本文たる寒山詩であるが、この本には全部の詩を五言、七字、三字と三つに分類して刻されて居る。そして三字詩の後に「拾遺二首新添」があり、下に小字で、「二詩係老僧相傳」とある。(建德周氏本では、この小字の註は新添二首の末に

「已上詩除拾遺二首老僧相傳」 其外切依古印本排比  
次第耳」

と小字双行で刻されて居る) この様に詩の形の上から分類を三つにしたのは現存のものでは正中版が最も早いものであつて、それ以前には宋版も建徳周氏本も七五言詩と三字詩の二分類であり、その他の版はすべて正中版と大同小異である。

詩の數の上ではこの版は前述せる通り、三百十三首であり、宋版は三百四首、建徳周氏本は三百十五首、朝鮮版は三百十一首であるが、拾遺二首が拾得詩の末の部分に附されてあるから、實際はこの版と同様三百十三首である。これら版本の中、詩の數及び詩そのものが同一なのは正中版と朝鮮版のみで、他の版は夫々異つた個所が見られる、即ち正中版の二一四番(建徳周氏本二三四)の詩

勸徐三界子、莫作勿道理、理短被他欺、理長不奈徐、  
世間濁濫人、恰似鼠黏子、不見無事人、獨脫無能比、  
早須返本源、三界任緣起、清淨入如流、莫飲無明水。

と二一五番(二三五)の詩

三界人蠢蠢、六道人茫茫、貪財愛嬌欲、心惡若豺狼、  
地獄如箭射、極苦若爲當、兀兀過朝夕、都不別賢良、

好惡摠不識、猶如豬及羊、共語如木石、嫉妬似顛狂、  
不自見已過、如豬在圈臥、不知自償債、却笑牛牽磨。  
の二首が宋版では一首となつて二三一番目に出て居り、  
又、正中版二五五(二七七)の

語徐出家輩、何名爲出家、奢華求養活、繼綴族姓家、  
美舌甜唇膏、諂曲心鉤如、終日禮道場、持經置功課、  
鑪燒神佛香、打鐘高聲和、六時學客春、晝夜不得臥、  
祇爲愛錢財、心中不脫灑、見他高道人、却嫌誹謗罵、  
驢屎比麝香、苦哉佛陀耶。

と二五六(二七七)の

又見出家兒、有力及無力、上上高節者、鬼神欽道德、  
君主分輦坐、諸侯拜迎逆、堪爲世福田、世人須保惜、  
下下低愚者、詐見多求覓、濁濫即可知、愚癡愛財色、  
著却福田衣、種田討衣食、作債稅牛犢、爲事不忠直、  
朝朝行幣惡、往往痛腎脊、不解善思量、地獄苦無極、  
一朝著病纏、三年臥牀席、亦有真佛性、翻作無明賊、  
南無佛施耶、遠遠求彌勒。

との二首が宋版では一首になつて二七一番目に排されて居り、同様に正中版二八二(三〇三)と二八三(三〇四)の二首が一首で宋版二九五に、又逆に、正中版二九四(二九七)の一首が宋版では二首に分れて、前四句が一九

五に、後四句が一八六に、又正中版二九一（一九三）の  
 余見僧繇性希奇、巧妙間生梁朝時、道子颯然爲殊特、  
 二公善繪手毫揮、逞畫圖眞意氣異、龍行鬼走神巍巍、  
 饒貌虛空寫塵跡、無因畫得志公師。

が宋版一九二ではこの詩の中四句、即ち「道子颯……神  
 巍巍」の部分が抜けて居り、二九二（一九四）も亦中四句  
 が抜けて一九三に排列されて居る。又、正中版の八八、  
 一一九、一六一、二一八、二四四、二七八、二九六、三  
 〇五の八首の詩は宋版には全く見當らず、二七八は建德  
 周氏本にも見當らず、又、宋版の二九四の詩は正中版、  
 建徳周氏本になく、建徳周氏本の二六〇、二九九の二首  
 は宋版、正中版共に見當らない。

次に詩の排列順序であるが、ここでも正中版と朝鮮版  
 とは殆んど同排列であるが、ただ正中版の一〇〇番目の  
 「不須攻人惡……云々」の詩が朝鮮版では寒山詩の末尾  
 に排されて居り、拾遺二首が前述せる通り拾得詩の末尾  
 に來て居る所が異つて居る。（これは版刻の際に忘れら  
 れた爲、うしろに附されたので、別に意圖はなからう）  
 そして建徳周氏本では大體似て居るが、途中抜けた部分  
 が後の方へ來てばらばらに入つて居る。そして宋版でも  
 似ている個所が部分的に見うけられ、その間に前の部

分、後の部分が所々入り込んで居る。この様な排列順  
 序、詩の出入を見ても後に述べんとする文字の校勘と共  
 に大體の刊行年代順が明らかとなる。次に参考の爲、正  
 中版を標順として排列順序を表で表はしてみると

正中版(朝鮮本) 建徳周氏本 宋版  
 寒山詩

一	凡讀	一	二
二	重巖	二	一
三	可笑	三	三
四	吾家	四	一一
五	琴書	五	一二
六	弟兄	六	一三
七	一爲	七	一四
八	莊子	八	一五
九	人問	九	一六
一〇	天生	一〇	一七
一一	驅馬	一一	一八
一二	鸚鵡	一二	一九
一三	玉堂	一三	二〇
一四	城中	一四	七
一五	父母	一五	一一

三六	三五	三四	三三	三二	三一	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六
東家	三月	雨龜	聞道	少年	香杏	白雲	六極	登陟	茅棟	有鳥	智者	快撈	妾在	有一	俊傑	欲得	手筆	歲去	四時	家住

三六	三五	三四	三三	三二	三一	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一	二四一	三〇	二九	二八	二七	八	四	二五	二四	二三	二二
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	---	---	----	----	----	----

五七	五六	五五	五四	五三	五二	五一	五〇	四九	四八	四七	四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三七
我見	田舍	我見	桃花	可憐	有酒	垂柳	吾心	相喚	一向	竟日	驩馬	誰家	物臥	獨氏	璨璨	生前	慣居	白鶴	富兒	

五八	五七	五六	五五	五四	五三	五二	五一	五〇	四九	四八	四七	四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三七
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

六一	六〇	五九	五八	五七	五六	五五	五	五四	五三	五二	五一	五〇	四九	四八	四七	四六	四五	四四	四三	四一
----	----	----	----	----	----	----	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----



七八	七七	七六	七五	七四	七三	七二	七一	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	六四	六三	六二	六一	六〇	五九	五八
益	卜	縱	有	世	不	婦	啼	快	豬	有	山	山	默	乘	浩	若	羣	春	洛	極
者	擇	侏	漢	有	行	女	哭	哉	喫	人	客	中	默	茲	浩	人	女	女	陽	目

七九	七八	七七	七六	七五	七四	七三	七二	七一	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	六四	六三	六二	六一	六〇	五九
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

八〇	七九	二九三	七八	七七	七六	七五	七四	七三	七二	七一	七〇	六	六九	六八	六七	六六	六五	六四	六三	六二
----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	----	----	----	----	----	----	----	----

九九	九八	九七	九六	九五	九四	九三	九二	九一	九〇	八九	八八	八七	八六	八五	八四	八三	八二	八一	八〇	七九
偃	尋	欲	躋	推	烝	有	噴	賢	天	天	世	惡	隕	去	貧	多	白	我	碧	徒
息	思	識	躋	尋	砂	人	噴	士	下	高	有	趣	是	家	人	少	拂	今	澗	勞

一〇二	一〇一	一〇〇	九九	九八	九七	九六	九五	九四	九三	九二	九一	九〇	八八	八七	八六	八五	八三	八二	八一	八〇
-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

一〇二	一〇一	一〇〇	九九	九八	九七	九六	九五	九四	九三	九二		九一	八九	八八	八七	八六	八四	八三	八二	八一
-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	--	----	----	----	----	----	----	----	----	----

一〇〇 一〇一 一〇二 一〇三 一〇四 一〇五 一〇六 一〇七 一〇八 一〇九  
 不 富 世 層 滿 施 止 或 少 變 書 貧 柳 大 赫 吁 田 箇 爲 浪 富  
 須 兒 有 層 卷 家 宿 有 小 化 判 驢 郎 有 赫 嗟 家 是 人 造 貴  
澗

一〇三 一〇四 一〇五 一〇六 一〇七 一〇八 一〇九 一一〇 一一一 一二二  
 一〇二 一〇三 一〇四 一〇五 一〇六 一〇七 一〇八 一〇九 一一〇 一一一

一〇三 一〇四 一〇五 一〇六 一〇七 一〇八 一〇九 一一〇 一一一 一二二  
 一〇二 一〇三 一〇四 一〇五 一〇六 一〇七 一〇八 一〇九 一一〇 一一一

一二一 一二二 一二三 一二四 一二五 一二六 一二七 一二八 一二九 一三〇  
 我 新 大 老 雍 鳥 昨 丈 之 昨 之 人 世 董 簡 人 城 下 自 我 夕 出  
 見 穀 有 翁 容 語 日 夫 子 夜 生 有 一 郎 是 以 北 愚 有 行 陽 身  
誰

一二五 一二六 一二七 一二八 一二九 一三〇 一三一 一三二 一三三 一三四 一三五  
 一四一 一四二 一四三 一四四 一四五 一四六 一四七 一四八

一二四 一二五 一二六 一二七 一二八 一三三 一三四 一三五 一三六 一三七 一三八 一三九  
 一四一 一四二 一四三 一四四 一四五 一四六 一四七 一四八

一四二	有樂	一四六	一四九	一六三	一六六
一四三	獨坐	一四七	一五〇	一六四	一六七
一四四	一人	一四八	一五一	一六五	一三二
一四五	他賢	一四九	一五二	一六六	一六七
一四六	俗薄	一五〇	一五三	一六七	一六八
一四七	是我	一五一	一五四	一六八	一六八
一四八	人生 <small>一百年</small>	一五二	一五五	一六八	一七〇
一四九	教汝	一五三	一五六	一六九	一六九
一五〇	寒山多	一五四	一五七	一七〇	一七二
一五一	有樹	一五五	一五八	一七一	一七三
一五二	寒山有	一五六	一五九	一七二	一七四
一五三	有人異	一五七	一六〇	一七三	一七五
一五四	昔時	一五八	一六一	一七四	一七六
一五五	我見 <small>世間人</small>	一五九	二四〇	一七五	一七七
一五六	身著	一六〇	二九一	一七六	一七八
一五七	可貴	一六一	一六二	一七七	一八一
一五八	余家	一六二	一六三	一七八	一八三
一五九	男兒	一六三	一六四	一七九	一八四
一六〇	粵自	一六四	二六	一八〇	一八五
一六一	可重	一六五	一六五	一八一	一八六
一六二	閑自	一六六	一六五	一八二	一八七
				一八三	一八七
				一八四	一八七
				一八五	一八七
				一八六	一八七
				一八七	一八七
				一八八	一八七
				一八九	一八七
				一九〇	一八七
				一九一	一八七
				一九二	一八七
				一九三	一八七
				一九四	一八七
				一九五	一八七
				一九六	一八七
				一九七	一八七
				一九八	一八七
				一九九	一八七
				二〇〇	一八七



二四六	二四五	二四四	二四三	二四二	二四一	二四〇	二三九	一三八	一三七	一三六	一三五	一三四	一三三	一三二	一三一	一三〇	二二九	二二八	二二七	二二六
適	我	可	平	我	自	無	五	寒	時	可	余	二	我	鑑	何	傳	余	昨	我	一
聳	見	貴	野	見	羨	衣	嶽	山	人	歎	勸	儀	見	縷	以	語	鄉	到	見	生
	<small>世間人</small>			<small>轉輪王</small>				<small>樓隱處</small>				<small>黃河水</small>							<small>出家人</small>	
二六六	二六五	二六四	二六三	二六二	二六一	二六〇	二五九	二五八	二五七	二五六	二五五	二五四	二五三	二五二	二五一	二五〇	二四九	二四八	二四七	二四六
二六二	二六一		二六〇	二五九	二五八	二五七	二五六	二五五	二五四	二五三	二五二	二五一	二五〇	二四九	二四八	二四七	二四六	二四五	二四四	二四三
二六七	二六六	二六五	二六四	二六三	二六二	二六一	二六〇	二五九	二五八	二五六	二五五	二五四	二五三	二五二	二五一	二五〇	二四九	二四八	二四七	二四六
有	高	世	勸	千	今	自	元	本	巖	寒	又	語	憶	常	可	世	自	寄	隱	盤
簡	高	閒	你	雲	日	古	非	志	前	巖	見	你	得	聞	笑	事	從	語	士	陁
二八八	二八七	二八六	二八五	二八四	二八三	二八二	二八一	二八〇	二七九	二七八	二七七	二七六	二七五	二七四	二七三	二七二	二七一	二七〇	二六九	二六八
二八一	二八〇	二七九	二七八	二七七	二七六	二七五	二七四	二七三	一〇	二七二	夕	二七一	二七〇	二六九	二六八	二六六	二六五	二六四	二六三	二六二

二六八	我住	二八九	二八二	二八九	雲山	一二三	一二二
二六九	寒山	二九〇	二八三	二九〇	一住	一八二	一八〇
二七〇	我見	二九一	二八四	二九一	余見	一九三	一九二
二七一	寒山	二九二	二八五	二九二	久住	一九四	一九三
二七二	鹿生	二九三	二八六	二九三	千生	一九六	一八五
二七三	花上	二九四	二八七	二九四	老病	一九七	一八六・一九五
二七四	樓遲	二九五	二八八	二九五	世聞	一九八	一八七
二七五	昔日	二九六	二八九	二九六	昔年	一九九	
二七六	欲向	二九七	二九〇	二九七	衆星	二〇〇	一九四
二七七	我見	二九八	二九〇	二九八	寒山	二〇一	一九九
二七八	我今		二九二	二九九	寒山	二〇二	二〇三
二七九	君看	三〇〇	二九二	三〇〇	我向	二〇三	二〇四
二八〇	晝棟	三〇一	一三〇	三〇一	我家	二〇四	二〇五
二八一	出生	三〇二	一三一	三〇二	世人	二〇五	二〇六
二八二	寒山	三〇三	二九五	三〇三	余家	二〇六	二〇七
二八三	沙門	三〇四	夕	三〇四	丹丘	一九五	一九一
二八四	有人	三〇五	二五六	三〇五	自從	二一二	
二八五	五言	二七一	二六七	三〇六	寒山	三〇六	二九七
二八六	余曾	三八	四二	三〇七	寒山	三〇七	二九八
二八七	貧愛	八四	八五	三〇八	我居	三〇八	二九九
二八八	汝謂	八九	九〇	三〇九	寒山	三〇九	三〇〇

拾得詩

一 諸 佛 一  
 二 嗟 見 世間人猶箇 二  
 三 出 家 三  
 四 養 兒 四  
 五 得 此 五  
 六 佛 哀 六  
 七 佛 捨 七  
 八 嗟 見 世間人亦却 八  
 九 我 詩 九  
 〇 有 傷 〇  
 一 世 閑 一  
 二 男 女 二  
 三 世 上 三  
 四 我 勸 四  
 五 寒 山 五

三二〇 重巖  
 三二一 寒山子  
 三二二 我見世間人  
 三二三 家有寒山詩  
 三〇一 從來  
 三〇二 若解  
 三〇三 運心  
 三〇四 彌猴  
 二〇 君不  
 二一 故林  
 二二 自笑  
 二三 一入  
 二四 躑躅  
 二五 銀星  
 二六 閉門  
 二七 悠悠  
 二八 無去  
 二九 少年  
 三〇 三界  
 三一 閑入  
 三二 古佛  
 三三 各有  
 三四 出家  
 三五 常飲  
 三六 雲山

二一 〇 九 八 七  
 二〇 〇 九 八 七  
 二一 〇 九 八 七  
 二二 〇 九 八 七  
 二三 〇 九 八 七  
 二四 〇 九 八 七  
 二五 〇 九 八 七  
 二六 〇 九 八 七  
 二七 〇 九 八 七  
 二八 〇 九 八 七  
 二九 〇 九 八 七  
 三〇 〇 九 八 七  
 三一 〇 九 八 七  
 三二 〇 九 八 七  
 三三 〇 九 八 七  
 三四 〇 九 八 七  
 三五 〇 九 八 七  
 三六 〇 九 八 七

一 (居半のみ)

次に缺筆について見るに、先ず各版の缺筆された文字を擧げてみると(序、豊干録、拾得録、拾得詩、三隠集

三五	閑自	五四	四七	四〇
五二	水浸	五二	四八	四二
五三	雲林	五三		
四九	松月	四九	四五	四四
四七	嗟見	四七	四三	四三
四六	平生	四六		
四五	自從	四五	一	六
四四	般若	四四		
四三	左手	四三	五	四
四二	余住	四二	四	三
四一	君見	四一	三	二
四〇	我見	四〇	二	一
三九	我見	三九	四二	四一
三八	若論	三八	四一	四〇
三七	後來	三七		

(前半)

記、釋音の部分も含む)

玄	(太祖)	玄序	258	227	〇	〇	〇	玄序	244	拾16
朗	(太祖)	〇	〇	〇	〇	〇	〇	朗	166	
殷	( )	〇	〇	〇	〇	〇	〇	殷	153	153
恒	(眞宗)	恒	66	147	150	恒	恒	67	151	154
貞	(仁宗)	貞	68	151	〇	貞	貞	69	155	7
屬	(英宗)	〇	〇	〇	〇	〇	〇	屬	拾22	
丸	(欽宗)	九	116	拾52	〇	〇	〇	〇	〇	〇
構	(高宗)	構	拾1	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
嗽	(光宗)	嗽	拾21	釋音	〇	〇	〇	〇	〇	〇
廓	(寧宗)	廓	67	208	豐1	〇	〇	〇	〇	〇

(〇印は缺筆せざるもの数字は詩の番号)

となつて居る。この中缺筆された最も後の時代のもは云うまでもなく、南宋の寧宗(一一九五—一二二四)の諱たる「廓」であり、この文字の缺筆されたものは正中版にのみ用いられて居る。だから、この版のもとになった版は南宋の末年、即ち理宗以後のものであり、志南の刊したものの、即ち淳熙十六年(一一八九)よりも後れる事三

正中版 朝鮮版 建徳周氏本 宋版



十數年以上となる。これにより、校合の時代、即ち寶祐三年に近い時代の天子の避諱は比較的嚴密に行われている事、又他の版に比しても寶祐本が一番その制度を重んじている事がわかる。

次に文字の校合であるが、今ここでは紙面の都合上詳細には述べる事は不可能であるから、簡単に詩集の最初の部分及び最後の部分の若干例を擧げてみると次の通りである。即ち

宋版	建徳周氏本	正中版	朝鮮本
×三	二	二	三
幡	番	番	番
重	動	動	動
×鶴	鶴	鶴	鶴
巖	崑	崑	崑
菓	果	果	果
材	才	才	才
魁偉	瓌璋	瓌璋	瓌璋
你	爾	爾	爾
家	在	在	在
安隱	安居	安居	安居
巖穴	巖岫	巖岫	巖岫

繼	徐動合和儀	斷	徐動合禮儀	斷	徐動合禮儀	斷	同上	斷	同上
鳴中施禮律	和鳴中音律	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
携	携	携	携	携	携	携	携	携	携
嬰	嬰	嬰	櫻	櫻	櫻	櫻	櫻	櫻	櫻
棍	棍	棍	禪	禪	禪	禪	禪	禪	禪
鼓	鼓	鼓	鼓	鼓	鼓	鼓	鼓	鼓	鼓
始	會	會	會	會	會	會	會	會	會
金瓊	金瓊	金篋	金篋	金篋	金篋	金篋	金篋	金篋	金篋
×笋芽	筍芽	筍芽	筍芽	筍芽	筍芽	筍芽	筍芽	筍芽	筍芽
爭	多	多	多	多	多	多	多	多	多
苦花	苦桃	苦桃	苦桃	苦桃	苦桃	苦桃	苦桃	苦桃	苦桃
×豐干老	豐干道	豐干道	豐干道	豐干老	豐干老	豐干老	豐干老	豐干老	豐干老

となつて居る。この様に校合の面より見ても一部の例外(×印)は別として、前述せる詩の排列順序と合せ考えると各版の前後が大體見當がつくのである。即ち宋版から建徳周氏本、正中版の底本となつたもの、朝鮮版の順と考えられる。

以上で寒山詩の部分は概述したが、次に他の正中版で見られなかつた部分、即ち「豐干禪師錄(五言詩二首を含む)」、「拾得錄」、「拾得詩(五十五首)」、「釋音」及び「天台國清禪寺三隱集記」がある。この中「豐干禪師錄」

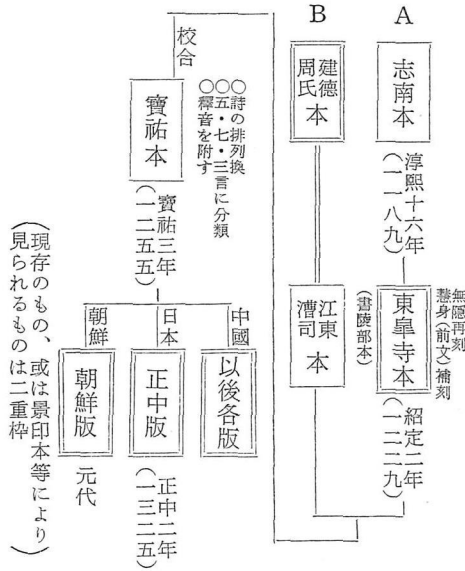
及び「拾得録」は宋版には載せられていないが、豊干禪師録の中の詩二首だけが「豊干禪師詩」として載つて居る。この二録が、建徳周氏本より、始まつたとするならば、排列、校合等と共に刊行系統を知る上に頗る便利となる。この豊干、拾得兩者の詩の排列は建徳周氏本及び朝鮮版と全く同様の排列であり(ただ前述せる通り寒山の拾遺詩二首だけが朝鮮版では拾得詩末に附されて居るのみ異なるが)、又、註が双行で記されて居る所まで同一であり、校合と考え合わせると次の如く考えられる。

即ち、まず前述した行果の文にある如く、江東漕司本によつて、從來あつた宋版寒山詩集(志南本の系統)を校合した、その江東漕司本が建徳周氏本、又はその系統のもので、出来上つたものが、即ち正中版或は朝鮮版の底本となつたもの(假に寶祐本とよぶ)で、この時に始めて詩を五言と七言との二つに分類し、(從來三字詩は別にされていた爲、實際は三分類)、更に之に釋音を附した、そしてこの時に相當な詩の排列換えをし、特に豊干詩、拾得詩の如きは江東漕司本をそのまま附したのである。この事は、文字の校合の面からも云える事であつて、豊干拾得兩者の詩の部分は寒山詩の部分ほどの校合を施していない。又、寒山詩と拾得詩の似ているのが數

首あるが、これは建徳周氏本の拾得詩四四の詩末に「此下與寒山詩大」 同小異語意相涉」なる小字双行の註があるが、これもそのまま同様である。この事からも、そのまま持つて來て附した事が伺える。又、三隱集記は宋版のものが、寶祐本にそのまま移されたらしく、文字の異同が殆んで認められない(建徳周氏本にはこの三隱集記は附いてない)、又、前の詩集の所では、宋版で、「總」になつて居る所が、正中版、朝鮮版はすべて「摠」になつて居たが、三隱集記の部分では三本共に「總」になつて居るが如きは、更にこの事を強く裏附けるものである。

又、釋音は前述した通り寶祐本において始めて附されたのであるが、建徳周氏本では詩の中で、その都度音をその文字の下に小字で双行に刻されていたものが、この時(寶祐三年)に之等全部を集めて釋音とし、更に若干を加えて卷末に附したのであつて、現存のものでは朝鮮版とこの版の二本にのみ存するのである。がしかし、四部叢刊初印本の底本になつたもの(朝鮮版)には釋音の前一丁が落丁になつて居たらしく、叢刊本には後の半丁のみしか景印されて居ない。この釋音の中にも亦正中版では缺筆(𠄎)が見られる。

以上の事をもとにして、更に島田翰氏の説<sup>④</sup>、及び呉其昱氏の説<sup>⑤</sup>を参考にして版本の系統を圖示すれば次の通りである。



以上簡單ながら、我が國印創史上、最古(現存)の漢籍翻刻本である正中版「寒山詩集」を他の若干の版本と比較しつつ紹介したが、從來知られて居なかつた、この首尾共に完全に揃つた正中版によつて次の事を伺う事が

出來たのである。即ち第一に、この寒山詩集が、我が國最初に刊されたものであり、以後の版本は全てこの系統に屬するものであり、他の系統のもの(宋版)は渡來はしたが、翻刻されなかつた事。第二に現在既に亡びて傳つてない江漕司本は、建徳周氏本の事か、或は之が系統のものである事。第三に各版の文字の校勘により、又、詩の排列順序及び分類により、大體の編輯、刊行の系統順序が明らかになつた事等である。要するに從來學會に知られて居た正中版寒山詩の他に、大谷大學圖書館にも、この詩集の完全な形ものが所藏されて居る事を紹介し、それに就いて若干版本の系統その他について思いあつた事を二三述べた次第である。

(尚、ここに用いた建徳周本とは四部叢刊後印本を、鮮鮮本とは同じく四部叢刊の初印本を夫々それに代えて使用した事をことわつて置く。)

註

- ① この石井氏所藏のものの経路その他は、同書複製本の解説及び、長澤規矩也氏著「書誌學論叢」に詳かにされてある。
- ② 訪餘錄「刻宋本寒山詩集序」。宋大字本寒山詩集「刻宋本寒山詩集序」
- ③ 同右

④ 同右「……然其所刻竄改易最多、東臯無隱、再刻於紹定己丑、而是篇則觀音比丘無我懸身所補刻、又在東臯寺本之後、又有寶祐乙卯行果就江東漕司本所重鐫者、至茲始分七言於五言之外、又以拾得加於豐干上、元時有高麗覆宋本、……」

⑤ Wu Chi-yu 吳其學: "A study of Han-shan (寒山)".  
(*Young Pao*. Vol. XLV p. 393~450)

(この小論を草するに當つて、神田喜一郎・野上俊靜兩博士より種々御指導と御教示をいただいた。)

(三八頁下段より)

これが事實、講説の場でどのように取扱われ、どのような効果を呈したかは今後に残される。また、講經文が「敦煌變文集」のなかで作品としてどのような位置におかれ、年代的にどのような具體性をもっているかはふれていない。いまは當面の問題を詳述し考察するにとどめた。